**復活節第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年５月５日**

**「信じる人々、拒む人々」**

**イザヤ書49章6節**

**49:6 こう言われる。わたしはあなたを僕として／ヤコブの諸部族を立ち上がらせ／イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして／わたしはあなたを国々の光とし／わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。**

**使徒言行録13章44～52節**

**13:43 集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。**

**13:44 次の安息日になると、ほとんど町中の人が主の言葉を聞こうとして集まって来た。**

**13:45 しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。**

**13:46 そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。**

**13:47 主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、／あなたが、地の果てにまでも／救いをもたらすために。』」**

**13:48 異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。**

**13:49 こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。**

**13:50 ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。**

**13:51 それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。**

**13:52 他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。**

**「妬む」この言葉を『広辞苑』で調べてみますと、「他人のすぐれた点にひけ目を感じたり、人に先を越されたりして、うらやみ憎む。」と記されてあります。簡単言えば「妬み」とは「羨ましいという気持ち」です。例えばAさんは自分よりも学歴も職業も一流で子供にも財産も恵まれて幸せな家庭を持っているとAさんに対して、ただ単純に「すごいな」という思いだけでなくて、わたしたちはどうしても「羨ましい」という思いを持ってしまうものです。**

**私たちがイエス様を信じたらねたむ思いから解放されるかというと、残念ながらそうではありません。例えばある教会が伝道集会をして礼拝堂に入りきらないくらいに多くの人が来たということを聞くと、私たちはやはり単純に「すごいな」という気持ちと同時に何か心穏やかでない気持ちが生まれてきてしまうのです。私たちはこんなに頑張って伝道しているのに人が来ない、なのになんでその教会には人が来るのだろう、そういった思いを抱いてしまうというのも正直なところではないかと思うのです。それが「よし、じゃあ私たちも負けないように頑張ろう！」とポジティブな思いになればむしろ原動力となるのですが、「うらやみ憎む」とあるようにその教会に憎しみの感情を抱いてしまってその教会の集会の邪魔をしてしまうことになってしまうとそれは大きな問題になってしまうのです。実際にはそんな行動はとることはないと思うのですが、私たちの心の中にはそういった「妬み」の感情と切っても切れないものがあるのです。つくづく人間というのは弱い存在であることを思わされるのです。**

**「また聞きたい」「来週の礼拝で同じ話をして欲しい」その願いにこたえてパウロとバルナバは次の週の礼拝でも同じ話、同じ説教をしました。町中のほとんどの人がパウロが語る神の言葉を聞くために会堂にやって来ました。普段はユダヤ教徒のユダヤ人と改宗者が集まるこの会堂がこんなに人であふれたのは初めてのことでした。その様子に「ひどくねたんだ」人たちがいました。ユダヤ人たちです。**

**実は彼らこそが先週の礼拝でパウロが語る説教を聞いて「また聞きたい」「来週の礼拝で同じ話をして欲しい」とお願いした人たちです。パウロの説教を一人でも多くの人に聞いてもらいたいと願い、パウロとバルナバの弟子として伝道旅行についていこうとさえした人たちです。彼らはパウロたちから「神の恵みに留まるように」促されて、アンティオキアで神の恵みに留まって歩んだ人たちです。多くの人に翌週の礼拝のことを告げて人を誘ったのでしょう。噂がうわさを呼んで実に多くの人が会堂に詰めかけたのです。そこにはユダヤ人はもちろんでしょうが多くの異邦人もいました。いつもならユダヤ教の会堂に来ないというよりもユダヤ人と異邦人の隔ての壁があるために来ることができない異邦人が大勢やってきたのです。**

**その様子を見てユダヤ人たちは「ひどくねたんだ」のです。原文の直訳は「ねたみで満たされた」です。神の恵みに留まり、神の恵みに満たされているはずのユダヤ人たちが、異邦人たちが多く詰めかけた様子を見て「ねたみで満された」のです。「伝道の旅をしている説教者がたった一度説教をしただけでこんなにもたくさんの人が集まるなんて、しかも神の救いに預かれない異邦人がたくさんいるではないか。こんなことは許せない。けしからん。なんと妬ましく憎いことか」ねたみの感情に満たされたユダヤ人たちは手のひらを返したようにパウロが語る説教に対して口汚くののしりパウロの説教の邪魔をしたのです。**

**パウロとバルナバはそのようなユダヤ人たちに勇敢に語ります。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。」（46節）。さらに旧約聖書イザヤ書49：6の今日の旧約聖書の箇所を引用して、神が「私たちを異邦人の光と定めた」のであることをはっきりと語ったのでした。**

**「異邦人の光」パウロのこの言葉を聞いていた異邦人たちは、自分たちは異邦人というだけでユダヤ人から汚らわしく扱われ、食事どころか会話もしてもらえない交わりを持てない、神の救いから外れ、いわば暗闇の中を歩まなければならなかった人々です。救いの光が希望の光が見えなかった異邦人たちです。そんな異邦人たちにとってパウロが「異邦人の光と神が定めた」と言われたことはどんなに嬉しいことでしょう。神は我々を見捨てておられない。私たちも救いに預かれるんだ。パウロが語る福音、イエス・キリストの十字架と復活の福音を信じるだけで私たちは救われ永遠の命をいただけるんだ。生きる勇気と希望を与えられたに違いありません。だから異邦人たちは主の言葉を讃美して信仰に入ったのです。「イエスは主なり」と信仰の告白をして、今ここピシディア州のアンティオキアにキリストの教会が誕生したのです。そして彼らはイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝え、証しをして広まっていったのです。**

**しかし、ユダヤ人たちはますますその様子が気に入らない。敬虔なユダヤ教徒たちを扇動してパウロとバルナバを迫害して、ついに二人を追い出したのでした。ねたみに満たされたユダヤ人たちの心にイエス様の愛が入り込む場所がなかったのでした。**

**かつて暗闇の中を歩んでいた異邦人たちを中心にした教会は聖霊と喜びに満たされて、救われた喜びを語り伝えたのです。**

**星野富弘さんが4月28日に78歳で天に召されました。突然の訃報に多くの方が驚かれたと思います。私もその一人ですが、富弘さんが描かれる詩画（しが）に慰められ励まされ生きる希望を与えられた方が多いと思います。**

**富弘さんは体育の教師になりわずか数カ月で授業中の事後で首から下が動かなくなりました。生きていても仕方がないと毎日思い、辛く苦しい闘病生活を送る星野さんのもとに大学時代の先輩がお見舞いに来てくれました。そして、「ぼくにできることは、これしかありません」と後日聖書を届けてくれたのです。星野さんは聖書を読み、イエス様の十字架の愛を知り、かつては宗教は弱い人が頼るものだと思っていたけれど、キリスト教はそうではないと知り、やがて信仰の告白に導かれたのです。**

**富弘さんが天に召されたことで、富弘さんのことを色々調べていたらイエス様を信じるようになったきっかけに次のようなエピソードがあると知りました。富弘さんが病院に入院していた時、スキーで転倒した中学生が入院してきました。彼は富弘さんと同じように体がマヒして全く動きませんでした。そんな彼がやがて回復して手足が動くようになり、自分で食事もできるようになりました。最初富弘さんは彼のことを励ましてきましたが、彼が回復するにつれて激しいねたみの感情を抱くようになりました。**

**「体のどこかが人の不幸を笑っている。  
ひとのしあわせがにがにがしく  
『あいつもおれみたいに動けなくなればいい』と思ったりする。  
体の不自由から生じたひがみだろうか。  
心の隅にあった醜いものが、  
しだいにふくらんできたような気がする。」**

**と、後にその時の感情を詩にされています。富弘さんはねたみを通して自らの心の醜さと向き合いました。さらには、孤独、不安、罪責感に恐れおののくようになります。そんな時に聖書を読み深い慰めを与えられたのがイエス様の言葉でした。**

**「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」（マタイ11：28）**

**富弘さんは、イエス様はこんな罪深く醜い私のために十字架に掛かって死んでくださった。こんな私のために祈って下さっている。そのイエス様の深く大きな愛に気づかされて、イエス様の招きに応えて、イエス様を信じて生きていく決心をしたのです。**

**そしてイエス様に愛されて生かされている喜びを口にくわえた筆で表して多くの作品を生み出されました。**

**富弘さんの詩画の中で私が一番好きな作品があります。それは「いのち」という作品です。オダマキの絵に詩が書かれてあります。**

**「いのちが一番大切だと思っていたころ**

**生きるのが苦しかった**

**いのちより大切なものがあると知った日**

**生きているのが嬉しかった」**

**「いのちより大切なもの」が何であるか、富弘さんはこの詩画ではっきりと何かは書かれていません。それはあえて書かないことで、その大切なものを見出してほしい、出会ってほしいという願いがあるのではないかと思います。この世には自分の命よりも大切なものがある、それを見出してほしい、かつての苦しかった私がそれを見出したように。富弘さんは大きな事故で体が動かなくなり生きる意味が見いだせず毎日暗闇にいるようでした。ねたみを通して自らの醜さを突き付けられました。そんな中で富弘さんは自らの命を投げ出して下さったお方に出会ったのです。十字架で自らの命を捨てて、この醜い私を救い永遠の命を与えて下さったそのお方こそが命よりも大切なものであることに気づかされて、命よりも大切なイエス・キリストのために生きてゆかれたのです。**

**暗闇の中を歩んでいた異邦人たちはパウロが語るイエス様の福音に出会いました。私たちは救われないだろう、そんな暗闇の中にいた異邦人たちが「異邦人の光」と神様が定めたパウロによって「暗闇の光」であるイエス様に出会って生きる希望を見出したのです。それはかつての富弘さんのようです。彼らもまた「いのちよりも大切なもの」に出会って、その喜びを周りの人たちに語り伝えたのです。**

**そしてかつて律法を守ることこそが大切だと信じて、イエス様を迫害し、教会を迫害していたパウロ自身もかつては暗闇の中を歩んでいました。律法を守ろうとすればするほど守ることができない自分の罪の姿、自分の醜い姿を突き付けられていました。自らの中にあるねたみに苦しめられた富弘さんと同じようです。そしてパウロも「暗闇の光」であるイエス様に出会いました。こんな罪深い醜い自分のために十字架で自らの命を捨てて、この醜い私を救い永遠の命を与えて下さったそのお方こそが「いのちよりも大切なもの」であることに気づかされたのです。その救われた喜びをアンティオキアの会堂でユダヤ人にも異邦人にも語るのです。一人でも多くの人が「いのちよりも大切なもの」であるイエス・キリストに出会って救われてほしい。そのパウロの願いは聖書を通して今も私たちに語られています。それが愛する独り子イエス様を私たちのもとに送って下さった神様の願いだからです。「主われを愛す」なのです。**

**私たちも「いのちよりも大切なもの」を伝えていきましょう。こんな私が愛されて罪赦されて生かされている。イエス様の十字架と復活の愛を宣べ伝え、一人でも多くの人が「いのちよりも大切なもの」に出会えるように、感謝と喜びをもって伝えていきましょう。**